



新潟の水辺だより

Vol.58

●編集発行 特定非営利活動法人新潟水辺の会 ●発行日 2003年8月25日 Vol.58

第1回にいがた水緑ワークショップを楽しもう！

新潟市周辺地域には、鳥屋野潟、福島潟、佐潟、じゅんさい池、信濃川、阿賀野川、小阿賀野川、西川、通船川、新居郷川、新川、農業用排水路や貯水池、日本海と多様な水辺があります。



昨年7月の全国川の日ワークショップで発表する新潟市立牡丹山小学校の児童のみなさん

一方、海岸の飛砂防止のクロマツ林、古い集落に残るケヤキなどの屋敷林、神社や寺の社叢林、学校や公園の緑化樹、広大に広がる郊外の水田の緑など豊かな環境が身近なところにあります。

しかしながら一部で改善されているものの全体としては、水辺に近づく環境はやすらぎ堤など限定的であり、都市部における緑環境は街路樹が主体で貧相な状況といえます。半面、水辺では水鳥などの生息しやすい環境になっているという現実もあります。

いずれにせよ、行政が造り出す水辺や緑だけでなく、市民が私的に、地域的に造り、育み、守る水辺や緑などまちづくりと一体の官民パートナーシップでの取組みが望まれています。

都市住民の生活と共存できる自然環境は何か、楽しみながら育む水辺や緑は何か、など都市住民が守り、育み、使い、管理していく水辺や緑を明らかにしていく取組みが期待されます。

そのため水辺と緑の活動市民団体と新潟地域振興事務所とで実行委員会を組織し、関係の市民団体・グループに呼びかけ「新潟地域の水辺と緑の保全と育成」をテーマに、情報交換とそのあり方を探る発表会をおこなうことになりました。

今まで、幾つかの活動発表は行われてきましたが、互いに聞き、意見を交わし、あり方を探り、目標を共有する場はなかったように思います。この発表会では相互に評価しあい、他グループ情報からのヒントを入手し、共有目標での取組みを生み出すなど、活動を軸とした「新しい水と緑のまちづくり」を見出すことを期待します。



事例に今年7月の全国川の日ワークショップの表彰式

第1回にいがた水緑ワークショップを楽しもう！

世話人（事務局長）相楽 治

舟運復刻ツアー 信濃川八景を訪ねて

平成15年4月18日、実に大正7年以来85年ぶりに旅客船が大河津分水までお客様を乗せて航行しました。分水町の大河津分水さくらまつりは、桜並木の下を練り歩く華やかなおいらん道中が有名ですが、まつりに新しい魅力を付け加えようと、ウォーターシャトルによる遊覧クルーズが着目され、新潟市からベアトリス号が大河津まで航行することになりました。



桃や桜が真っ盛りの川辺を往く
(角田キヨノさん絵)

どうせ大河津へ行くならば、往路と復路で旅客を募り、日本最長の川の旅を楽しんでもらおうという企画を立てることにしました。4月の航行を前に昨年12月と今年3月の2回試験航行も行ないましたが、白根市の赤浜防災船着場から上流はめったに行くことのない航路故、途中どのような危険が潜んでいるかもわかりません。

当日は気持ちの良い晴天となりました。大熊会長率いる水辺の会会員も10数名乗船し、13時ちょうどに朱鷺メッセ船着場から大河津目指して出発です。

船内では水辺の会の会員や「信濃川大河津資料館」館長の五百川清さんのお話など、盛り沢山のプログラムがめじろ押しでした。

さて、越後平野では5月の田植えに備え、灌漑用水を確保するため大島頭首工と蒲原大堰をせき止めて信濃川の水を蓄えます。このためこの2箇所の堰で、開門操作が必要となります。開門はほとん

ど使われていないため、いざ動かすとすると故障することもあるようで、この日は蒲原大堰の上流側ゲートが途中で上がらなくなりました。すぐに復旧しましたが、十数分の足留めとなりました。



水辺の怪バンドも出演
(中村正董さん絵)

蒲原大堰からは船の屋上へ登ってタイタニック気分を満喫してもらうことにしました。

この屋上デッキは新潟市内の橋が低いため花火観覧時を除き普段は使っていませんが、ウォーターシャトル船上で最高に気持ちの良い場所です。星空の下でこのデッキに立って前方を眺めていると広大無辺の宇宙空間を無動力で浮遊しているような錯覚を覚えることがあります。



リラックスしきった船内

夕闇に包まれても、川の上は残光を反射してほんのりと明るくなっていましたが、やがてすっかり暗闇に包まれてしまいました。大河津洗堰で最後の開門を通

(P3へ続く)



過ぎて、上流側にある船着場を最終目的地としていましたが、結局2箇所の閘門の通過に1時間以上を要したことから、大河津洗堰下流側の船着場で運航を打ち切ることになりました。

こうして、85年ぶりの大河津航路-信濃川舟運復刻ツアーは無事に終わりました。長時間の航行にもかかわらず、満足したという感想を残して行かれたお客様がほとんどで、今後も継続的に実施して欲しいとのご意見を多くいただきました。



大島頭首工の閘門にて

ヨーロッパでは、電車で1時間もあれば行ける距離を1週間かけて船で行くツアーがあります。昼間だけ航行し、流域の美しい街や村を訪ね、夜はホテルのように設えられた船内の客室コンパートメントに泊まり、同乗している腕利きシェフが調理する食事を楽しむことができるというツアーに根強い人気があるそうです。信濃川もこんな船旅が楽しめるようになったらなあと思いますが、流域の街並みや村がもっと美しくなっていくには相当な努力と時間が必要でしょう。それでも道路沿いにあるような醜い看板やパチンコ屋のネオンはまったく見られませんかし、桃や桜、梨の花が咲き乱れる風景は見なれた越後平野のそれとは異なる新しい印象を与えてくれることでしょうか。今回参加できなかった皆さんも陽光と雲、水が織り成す光景の虜になってみませんか？

(株) 信濃川ウォーターシャトル
栗原 道平
(写真 寺村 淳)

水と緑の環境活動団体調査

昨年新潟地域振興事務所より、水と緑の環境活動をしている団体の調査を受託しました。

新潟市街地周辺の環境保全団体の活動課題、今後の活動の方向、他団体との連携、行政との協力等の現状を把握し、今後の地域環境保全活動の支援、啓発を行う施策の検討資料とすることを目的とするものでした。

調査対象エリアは新潟市街地周辺とし、水に関する環境保全活動団体及び、緑に関する環境保全活動をしているNPO法人、ボランティア団体、自治会、学校等の団体を、水辺の会15年の活動で蓄積した資料よりリストアップし、団体責任者に対面調査等を実施し、既存団体の活動課題、活動の方向性等について報告書としてまとめました。

この聞き取りの中で

- ◎ ハード・ソフト及び予算的に不足している団体が多い。
- ◎ 人員不足。特に若い方が少なく、広範囲な活動が難しくなっている団体も多い。
- ◎ 川、潟、松林等の自然環境の問題解決がその地域・流域だけでは解決できず、広範囲な取り組みのネットワーク化が急務となっている。
- ◎ 同じ趣旨の団体とは情報交換・連携しているがまだ部分的なものが多く、今後他団体とのネットワークを望んでいる。
- ◎ 今後は、各団体の持っている知識・能力を行政が大いに使って戴きたいとの要望があった。

等の意見が多かった。

これ等を踏まえ、8月31日に環境保全団体の交流を目指した交流会『やろってば「水と緑」ワイワイガヤガヤよったかり』が新潟市弁天橋4のNSGカレッジリーグ学生プラザSTEPで行われます。

世話人 加藤 功

ラムサール条約と佐潟の賢明な利用

近年の佐潟をめぐる議論を聞いてみると、あらゆる人的な攪乱や外力を排除することが、ラムサール条約締結国（佐潟に関しては主として新潟市）の義務であると言ふような主張が先鋭化しているような気がする。

賢明な利用（ワイズユース）とは何かということについてももう一度考えてみたい。

ラムサール条約はその前文で、湿地の生態学的機能の重要性を強調するとともに「湿地は経済上、文化上、科学上及びレクリエーション上大きな価値を有する資源であること及び湿地を喪失することが取り返しのつかないことであることを確信」して協定したと記している。そして、第3条で「締約国は、登録簿に掲げられている湿地の保全を促進し及びその領域内の湿地をできる限り適正に利用することを促進するため、計画を作成し実施する」と規定している。

この「適正（又は賢明な）な利用」（以下、賢明な利用）がワイズユースである。

第3条は「賢明に利用することを促進するため」と明記しており、賢明な利用が単なる修辭的な文言ではなく、積極的で基本的な規定であることを示している。

そのことを具体的に示す証拠として、1987年の第3回締約国会議以降、1999年の第7回会議まで連続して議論され採択されたワイズユースに関する、8件の決議と6件の勧告及び関連する付属書がある。

例えば「持続的な利用とは（中略）現代の人間に対して湿地が継続的に最

大の利益を生産できるように、湿地を利用することである」（3.3）

「湿地が提供している機能や価値には次のものが含まれる。5. 漁業、牧畜業、農業基盤の提供、6. 野外でのレクリエーション及び教育」（3.3付属書）

「登録湿地の管理が改善されることによって利益を最初に受けるであろう地域住民に特に注意が払われる必要がある」（V.6付属書）

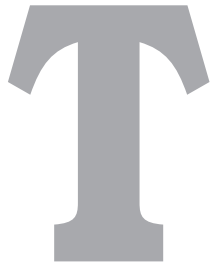
「多くの場合において地域社会がすでに、湿地の管理や持続可能な利用に関わってきており、湿地利用に関して長期にわたる権利、先祖伝来の価値観、伝統的知識や習慣を有していることも意識し」（VII.8決議）

「地域住民は、以下のような活動に代表される持続可能な生計の道を維持することを通じて、参加型管理から利益を得る。i.漁業及び狩猟、ii.農業及び干草作り、アシの収穫及び林産物の採取、iii.レクリエーション利用及びエコツーリズム」（VII.8決議付属書）などなどの文書が公開されている。

要するに登録湿地の地元の人たちが得てきた経済的な利益や、伝統的な利用実態に制限を加えるのではなく、湿地の管理を通じて地域振興が図られるような計画を作ることを締約国に求めているのである。

これらの書決議を恣意的に解釈するのではなく、真摯に受止め佐潟のワイズユースプログラムの作成を検討し実践することが行政やNPOの責任であろう。

世話人 石月 升



中ノ口川・小吉 夢の水辺の名所づくり

平成15年1月～3月にかけて、新潟県巻振興事務所から『信濃川水系中ノ口川中央部に水辺の会を育てたい』という要望があり、新潟水辺の会がワークショップを手伝うことになりました。



回を重ねるごとに盛り上がるワークショップ

「中ノ口川・小吉 夢の水辺の名所づくり」と題した計三回のワークショップ。目的は、10年前川沿いに燕市から新潟市の中心部（現在の市役所前）まで走っていた電鉄跡地の雑草問題の解決に発したことで、中之口村高野宮～潟浦新地区間（L=1.6km）において、地域住民と協働で電鉄の跡地のある堤防を活用した水辺の整備構想を策定することでした。

終戦直後と現在の空中写真を使ったワークショップでは、昔若者の参加者から川辺にあったカフェや茶屋、渡しなどの思い出や、これからの夢構想についての意見が数多く上げられ、予想以上に盛り上がりました。堤防の雑草に対し、草刈りや雑草の活用などの意見も数多くあがっていました。特に住民には、昔、良寛さんが中之口について詠った歌「この里の 桃のさかりに

きてみれば 流れにうつる 花のくれない」にあるように中ノ口川と「桃」に対する思い入れが強く、今後の活動に桃と川を活かせればという思いが強いようでした。

この3回のワークショップを受けた4月20日の桃の花見の席では、この水辺の名所を持続的に地域に利活用され親しまれる場所につくり、育てていくため、「川を楽しむ・小吉水辺の会」（通称、小吉水辺の会）が立ち上げられました。

今後の課題としては、雑草管理のためにも楽しく使いつづけることです。そのためこれまでのワークショップの参加者が中高齢者の男性に大きく偏っていることから、女性や子供の参加が必要であるといえます。また、会の維持や、事業の発展のため、小吉水辺の会の自主性、自立性に期待したいと思います。

寺村 淳

第一回 やろってば!! 「水と緑」 ワイワイガヤガヤ寄ったかり

2003年8月31日（日）

10:00～15:00

会場：NSGカレッジリーグ
学生総合プラザSTEP
新潟市紫竹山6（弁天橋西）

《お問合せ/申し込み先》
新潟県新潟地域振興事務所 地域振興課
電話：025-231-8112

ヨーロッパにおける2002年の大洪水の調査 簡易報告書

危機管理

ドイツ、チェコ、オーストリア、およびフランスでは、災害への対応は住民に一番近い行政機関である地方自治体があつた。

けれども、災害の規模が増加するにつれ、災害対応は県、州、そして国家に引き渡された。この基本的傾向は日本のシステムと同様である。

ドイツは連邦制を採用しており、災害対策は基本的に州政府が行うことになっている。

しかし、今回の洪水災害では、ザクセン州の要請により、被災者のサポートを行なう災害対策本部が連邦レベルで設置された。

州の境界を越えるような広範囲に広がる災害の場合、連邦政府に中央本部をおく必要性が審議され始めた。

チェコでは首相により、大臣で構成される危機管理委員との委員会が開催され、緊急事態が宣言された。

その後、政府レベルでの災害対策本部が設置された。オーストリアのケースでは政府が連邦軍の三分の一の兵力を配置する処置をとったが、被害者に対して主として援助や支援を行なったのは市民ボランティア組織であつた。それらの組織は強い義務感を持ち、よくトレーニングされ、装備も整っている。

一方、ドイツでは専門ボランティア組織である“技術支援グループ”が活躍した。この組織は連邦下の組織であるが、スタッフはボランティアで構成され、彼らはトレーニングを受け、中

心的な役割を担うことになる。彼らの役割は日本で言う“水防団”に似ているが、システムは、自衛隊の災害派遣制度に似ている。

彼らは高レベルの専門技術を持ち、災害時の現場では公務員と同じ手当ての支給を受ける。自発的なボランティアグループの力を軽視するわけではないが、技術と組織力を持った技術支援グループは明らかに大きな力を示す存在である。これは日本でも同様によい例として参考にできる。

ドイツやチェコでは被災者の避難の後、災害に巻き込まれた被災者などにサービスを提供するためのカウンセリングセンターを早急にオープンした。

日本でも心のケアの見地から、このようなことを熟慮し、参考にすべきである。

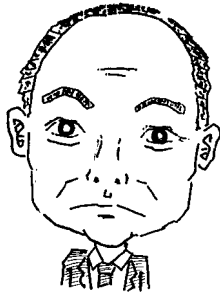
出典：“Year 2002 Flood Disaster Investigation Team to Europe Summary Report” 2003年3月、pp6~7

翻訳：大熊宏子、岡田真純、寺村 淳

お知らせ

水辺の会では毎月第1または第3土曜日に世話人の大熊宏子さんの呼び掛けで、海外の水辺に関するレポートの本誌勉強会を行っています。興味のある方は事務局にお問い合わせください。

会員紹介

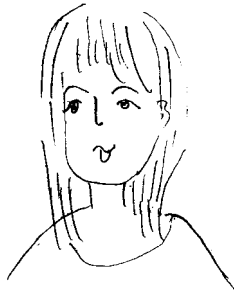


佐藤 章太 株式会社国際総合研究所 新潟市

私は小さい頃、自然の豊かなところで育ちました。その影響かもしれませんが社会人になってからも自然に関したことに興味があり、今では屋上緑化用の苔の生産や法面の保護用の緑化マットの製造等の仕事をしています。

暇な時間をつくってはよく三川村や笹神村の小川に行って足を入れ、冷たい感触に浸っています。

いろいろなことに興味がありますのでおもしろいことがありましたら御一報ください。



佐々木 恵美子 株式会社国際総合研究所 新潟市

私の生まれは自然の姿を表現する海を見て育ちました。そのせいなのでしょうが、自然が大好きです。

子どもが小さい頃は毎年のように夏になるとキャンプに出かけたものです。新緑の木々、なんとも言いようのないやわらかな表現を出してくれます。そして、小川・・・足を入れてみたい気持ちは今も変わりません。

自然の中の思い出づくりをしましょう！



渡辺 圭 見附市建設課 見附市

私の住んでいる見附には、刈谷田川が流れています。また、新潟県のへそ（重心）が見附にあることから、へそ公園や、名物??へそラーメンなどがあります。へそ公園の近くには小さな池があるのですが、ただの池ではなく、河川改修前の旧刈谷田川の蛇行していた跡なのだそうです。川の歴史は、川だけにあるのではなく、川から離れたところにも残っているものだと私自身最近感じさせられています。



小川 富由 国土交通省 東京都

郷里の加治川や新潟市内の信濃川、鳥屋野湯それに福島湯など水面の広さと空の広さを同時に感じられる水辺空間は貴重だと思います。ただ最近は下手な化粧が流行っているような感じがして残念です。as it isではないでしょうか。



山田 建夫 株式会社グリーン興発 新潟市

私は西川（一級河川）沿いに住んでいますが、昭和56年頃は未だ護岸工事がなされてなく、自然そのものの川で、子供達も川遊びをしていたものです。

しかし、その後護岸工事が施され、イメージが全く変わってしまった。現在は土砂の堆積もあり、汚れもひどいうえ、法面も雑草の繁殖によって、景観が、都市河川としての機能が失われている。そこで問題、行政は河川整備後の維持管理（河川周辺の有効利用等）に対し、意識が少し欠如している様に思われる。これからは民間移行（NPO、PFI等）によって自然を取り戻したいものです。

近江八幡めぐりと 北国街道長浜まちあるき

日時 2003年10月25日(土)
～26日(日)

日程

10月25日

07:30 新潟駅南口集合・出発

午後: 近江八幡見学

近江商人の築いてきた町並みや八幡堀を地元のガイドの案内で見学します。

夜: 懇親会

宿泊: 休憩村近江八幡(天然温泉)



昨年の石川、富山見学会の様子
(金沢市大野庄用水) 撮影: 森本 利

10月26日

午前: 近江八幡水郷めぐり、長浜市まち歩き

午後: 新潟へ移動

19:30 新潟駅南口到着・解散

参加費 20,000円程度

(昼食代、懇親会費、入館料、乗船料は別途)

交通 マイクロバスで移動

募集人員 25名

申し込み締め切り 9月10日

お問い合わせ、お申し込み先

嶋田 正章

電話・Fax 025-286-3547

メール mashimada0316@ybb.ne.jp

主催: 堀割再生物語プロジェクト実行委員会

共催: NPO法人新潟水辺の会

長野県新潟県合同研究会 『千曲川信濃川孝流会』

長野県水辺環境保全研究会と新潟水辺の会が一つのテーマで研究発表し、風呂とお酒で親交を深めます。

今年は長野県戸倉上山田温泉が会場です。皆様ふるって御参加下さい。

期日: 10月4日(土)～5日(日)

集合: 4日午後1時 長野市松代「ドライブイン・おぎのや」駐車場に集合(乗合自動車で行く場合は 新潟駅南9時集合で募集します。)

4日13:00～16:00

千曲川杵瀨地区「多自然型川づくり」の現地、治水目的の護岸や水制などが設置された場所等の視察

16:00～18:00

戸倉上山田温泉「ホテル清風園」会議室にて研修会

テーマ「水辺環境の創出」～野生生物のための水辺環境、人間のための水辺環境について～(基調講演、研究発表、活動発表など)

新潟からは以下の内容を予定しています。(変更の可能性あり)

1 信濃川最下流のナゴヤサナエの生態と人工護岸のあり方: 発表者・石月升
2 中ノ口川の水辺環境の再発見と行政・NPO・地元住民の協力について: 発表者・加藤 功・松野直一

夜 懇親会

10/5(日) 朝食後解散

参加費

研修会・懇親会・宿泊11,000円(交通費は各自・実費負担)

研修会のみは1,000円

申し込み・問い合わせ: 森本

電話 090-1613-1879

メール toorum@rose.ocn.ne.jp

催し物のご案内

主催・共催事業

8.24(日) Eボート大会

会場：信濃川やすらぎ堤

主催：信濃川Eボート大会実行委員会

8.31(日)10:00～15:00

第1回「水と緑」ワイワイガヤガヤ寄り寄り

主催：にいがた水と緑のワークショップ実行委員会

会場：NSGカレッジリーグ学生総合プラザSTEP

問合せ：新潟地域振興事務所 藤塚さん
025-231-8112

9.13(土)17:00～ 水辺の会通常総会

会場：新潟市関屋地区公民館

9.28(日)

佐潟ハス採りと潟業再考の集い

会場：佐潟公園自然生態観察園協広場

10.4～5(日)

信濃川千曲川考流会

長野市 有料(宿泊費、交流会費)

10.11(土)

通船川もりもり植樹

会場：河口山の下閘門左岸の森

10.25～26(日)

近江八幡めぐりと

北国街道長浜まちあるき

有料(交通費、宿泊費、懇親会費)

問合せ：嶋田025-286-3547

12月6日(土)予定

水辺シンポジウム(及び望年会)

会場：新潟市東地区公民館

協力事業

7.19(土)13:00～6:00

信濃川の今を考える会

会場：新潟市信濃川会館

無料、懇親会有料(3,000円)

問合せ：0258-92-5238

主催：こしじ水と緑の会

7.26(土)10:30～16:30

夢海岸フェスティバル2003

新潟市西海岸(舟栄中学校裏)

問合せ：025-228-1000内2856

新潟市港湾空港課

8.1(金)～3(日)

阿賀野川流域子ども交流会

主催 新潟県・福島県

問合せ：水辺の会事務局 杉山

7.27(日)9:00～13:00

中ノロ川の魅力再発見

～カヌー体験&川辺の構想づくり～

8.17(日) 中ノロ川・草刈りと花の構想づくり

9.27(土) 中ノロ川・収穫祭&葛リースづくりと整備構想づくり

10.18(土) 中ノロ川・水辺名所計画づくり

問合せ：川を楽しむ「小吉水辺の会」025-375-4379

8.23(土)10:00～20:00 万代橋誕生祭

会場：万代橋周辺

問合せ：025-228-1000

新潟市街づくり推進課

9.13(土)つうくり市民会議

万代市民会館

主催：通船川栗ノ木川下流再生市民会議

問合せ：新潟土木事務所025-231-8328

9.19～20(土)

水郷水都全国会議山形酒田大会

主催：水郷水都全国会議実行委員会

会場：酒田市

9.27(土)9:00～11:30

佐潟クリーンアップ活動

集合：佐潟公園あずまや

申し込み：新潟市西地区公民館 戸塚さん

電話025-261-0031

11.14～15(土)

環境フォーラム2003

会場：朱鷺メッセ

とりまとめ 森本 利

万代橋誕生祭に寄せて

新潟に住むものにとって、あるいは新潟に思いを寄せるものにとって万代橋はひとつの原風景といってよいだろう。三代目架橋時とほぼ同じ時期に生まれた方々の中に、自分の一生と新潟の町の歴史をなぞらえて思いを馳せるために、橋上での思い出をなつかしく語る方がいる。



八木朋直は米寿の記念に万代橋と新潟のまちへの想いを歌に詠んだ

初代萬代橋の建設資金を提供した八木朋直の額には、三代目の建設中の胸中が詠われている。「信濃川掛け渡し たる長橋は 大都市つくる基礎となりけり」

八木は昭和4年の8月23日の渡橋式にはすでにこの世を去っていた。

柳都大橋と新潟みなとトンネル開通によって、万代橋は1日6万台以上の交通量が4万台程度まで減少した。74年もの間、新潟の発展に尽

くした橋に一日間だけでも休んでもらうと車両通行止めを試みたが、準備調整時間切れで今年断念した。

水辺のカフェなどさまざまな街づくり団体が共同して開催する初めての万代橋誕生祭は、公共空間に市民がにぎわいをつくる本格的な機会として試されようとしている。

2003年8月21日

編集鳥 高橋 正良

mtakahashi@southernwind.co.jp

入会案内

この会は、遊び心半分・真面目心半分で活動しています。ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。

自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。

今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。

この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

■設立年：1987年10月1日 ■目的：水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。 ■代表者：代表 大熊孝（新潟大学工学部教授） ■会員数：個人175名・法人9団体（2002年11月現在） ■活動：水辺シンポジウムの開催/水辺ウォッチング/会報「新潟の水辺だより」の発行/「水辺環境整備に関する学習会/長野県富山県の水辺グループとの交流会/通船川、佐潟の調査・研究etc.

■年会費：個人会員一口1,000円を2口以上、賛助会員（法人など）一口5,000円を2口以上

●発行： 特定非営利活動法人 新潟水辺の会

●事務局： 〒950-0024 新潟市河渡2-2-8

Phone 025-270-9207

Fax 025-270-9207

e-mail: info@niigata-mizubenokai.or.jp

ホームページ

http://www.niigata-mizubenokai.or.jp/

事務局からのお願い

インターネットメールで随時会員の皆さんに情報をお届けしています。メールアドレスを新しく持った方、アドレスを変更された方は事務局まで御一報ください。

入会申込書

年 月

フリガナ氏名		男・女
		歳
特技や水辺への想い		メールアドレス
住所	〒 () -	
職業		
勤務先	〒 () -	

注) 紙面の都合上、縮小しています。250%程度拡大コピーをしてご使用下さい。